

「週刊金曜日」の12月1日号に、元イスラエル兵ダニー・ネフセタイ氏のインタビュー記事が掲載されていた。彼は来日して、家具職人になり注文家具の制作、オブジェの創作などをしながら、平和や人権をテーマに講演活動をしている。

10月7日、ガザ地区のハマスは数千発のロケット弾をイスラエルに撃ち込み、分離壁を乗り越え、音楽を楽しんでいた1200人を殺害し、240人を拉致してガザに連れ込んだ。今まで聞いたことのない襲撃で、イスラエルからの激しい報復を誰もが予想した。

ネフセタイ氏は、ハマスの襲撃に対しイスラエル人の反応を下記のように語っている。これまで「武力より対話による平和」と言っていた友人は「ハマスとの対話はありえない。ヒトラーとの対話が不可能だったように」と豹変した。幼なじみの女性から「ガザの全ての市民を抹殺してもかまわない」というメールが送られてきた。今や政府や軍だけでなく、国民も「ハマスは潰すしかない」という声一色になっている。対話や、復讐反対の声を上げる人は「裏切り者」、「非国民」扱いされる。ハマスが異常な活動をしているとの情報を前夜に受けていたが、高官たちの「判断ミス」で大失態となった。政府は、ハマスが赤ちゃんを殺すなどの残虐な映像を繰り返して流し、国民に憎悪を募らせ、復讐心を煽り、ガザへの無差別な空爆や無差別な地上侵攻で、政府と軍への批判を逸らそうとしている。テレビでは、イスラエル軍は善、ハマスは悪というストーリーに変わってしまっている。

ユダヤ人は神に選ばれた「選民意識」を持ち、「神様が一番上、次がユダヤ人。ほかは皆動物で、パレスチナ人も動物」とまで言う人もいる。他方、昔から差別され、嫌われているという被害者意識も強烈で、ホロコーストは反ユダヤ主義の結果だと見ている。ネフセタイ氏は、今回のハマスの襲撃は「天井のない監獄」と言われる所に押し込まれ、死を待つだけの絶望感がもたらした爆発だと捉えている。

以下、ネフセタイ氏の主張を紹介したい。深く感動し、平和はここから始まると思った。

①「パレスチナ人が幸せにならない限り、イスラエル人の幸せはないのです。」差別と抑圧を受け、人権も生存権も奪われている人が隣にいて、自分だけが安全であっても、決して幸せとは思えない。パレスチナ人の幸せがイスラエル人の幸せを作るという言葉は真実である。②「まず敵に殺され、悲嘆にくれる遺族の悲しみを自分の悲しみとしてリアルに想像することです。すると敵にも人権、つまり幸せになる権利があることに気づきます。そして、勇気をふるって復讐することを断念する。泣きながら我慢することです。」他人の悲しみを自分の悲しみとし、殺害関係にあらうとも、泣きながら復讐を断念する。そこに、互いの人権を認め合う関係が生まれる。③『武力による平和』、『抑止力が平和をもたらす』という理屈はウソだと今回ハッキリと証明されたのに、それを言うメディアがありません。」武力では平和は構築できない。武力を背景にした抑止力が平和を作るという理念は幻想であった。これを指摘するメディアはない。正鵠を得た言葉ではないか。④「日本は平和憲法を持っていますし、唯一の被爆国ですから、イスラエルの閣僚がガザ地区で原爆を使うことも『一つの選択肢』と発言した際、日本の首相が諫めれば説得力があったはずなのに、批判しませんでした。」イスラエル人から、このような発言を聞くことは恥ずかしいことではないか。日本は米国追従から脱し、平和に向かったの国際的発言と責任を担うべきである。⑤（原爆投下を批判しない）「政治家を選んでいるのは国民です。絶対に戦争を許さない政治家を選び育てるのは、市民の責任です。」どんな国家を作るかは主権を持つ国民の責任であることをしっかり自覚し、発言、行動することが求められている。